

「令和6年紫波町新春歴史フォーラム」を町文化財関係団体協議会が開催 **紫波町の史跡とその保存と活用** 盛岡市盛岡城復元調査推進室 ～地域の資源を生かしたまちづくり～ 似内啓邦氏が講演

樋爪館懇話会など13団体で構成する紫波町文化財関係団体協議会では、昨年引き続き紫波町新春歴史フォーラムを14日(日)、町情報交流館大スタジオで町内外から約70名に侘美紫波町教育員会教育長の来賓のもとで開催した。

このフォーラムの講師には、盛岡市市長公室盛岡城復元調査推進室の似内啓邦(よしくに)氏が招き「紫波町の史跡とその保存と活用《副題》地域の資源を生かしたまちづくり」と題して、約90分間の講演された。

似内氏が用いました講演資料から一部抜粋して掲載します。

■ 紫波町の歴史的環境

《 紫波町の指定文化財の特徴と魅力 》

- (1) 自治体が指定・登録・選定している文化財、国や自治体の成立ちや文化を知ろううえで欠くことのできない貴重な財産。

※指定：手厚い支援と強い文化財を保護

登録：補助金などの支援は手厚くないが、規制が緩やか。

選定：美術工芸など保存技術など。

- (2) 紫波町内の指定文化財105件の内訳は、建造物・絵画・彫刻・工芸品・考古資料・衣服の有形文化財は50件(国1、県14、町31)となっている。なお、名勝の指定物件ではない。(五郎沼、月の輪形など)

- (3) 紫波町内の文化財指定の傾向は、石碑と記念碑や仏像などの有形文化財(彫刻・工芸品)の指定が多いのが特徴。その他にも指定して保存をはかるべき文化財も多い。今後とも行政と地域が一体となった、保護(保存・活用)が必要。

- (4) 東長岡にある盛岡城石垣の残石のように、新たな歴史的文化遺産の発見は地域の特徴になり、広域的で永続的な地域への理解と愛着を育むことになる。

- (5) 地域の魅力は、史跡だけでなく、名勝、天然記念物、建造物、美術工芸品、民族文化財や文化的景観など、様々な要素の複合体によって魅力と個性が保たれており地域の個性と魅力を絶えず発見して見直して評価し、次世代に良好な状態で引き継いでいくことが地元の持続可能な活性化と地域力につながる。



似内氏パワーポイントを使っの講演(町情報交流館)



古館の川原毛瓦窯跡[県指定] (配付資料より転写)

このたび能登半島地震の災禍に遭われました、石川県・富山県在住の会員皆さまに心よりお見舞い申し上げます。早期の復旧・復興をお祈り申し上げます。

樋爪館懇話会 会員一同

令和6年1月17日に開催した月例発表会において、発表者が用いました資料から抜粋し、さらに文章は縮めて掲載した部分がありますのでご了承ください。

宇部真澄の「陸奥話記を読む④」

(22) 貞任の猛攻撃を斥け、官軍勝利す

貞任は、「官軍は兵糧が乏しく四方に食料を求めようとして陣の兵士は散っていき、陣営を守る兵士は数千人に過ぎない。今、大勢の兵士を率いて襲撃すれば、きっと打ち破ることができる」と言った。

そこで、貞任は精兵八千余を引き従えて、大地を轟かせて襲来した。賊兵の着る黒い鎧は湧き立つ黒雲のようであり、手に振りかざす白刃は日光に煌めいている。

一方、官軍の武則真人は、「今、貞任が挑んで戦おうとしているのは、天が将軍に勝機をお与えなされたのです。かつ、賊軍の気が黒々と楼のように立っているのは、戦って敗亡する兆しです。我が官軍はきっと勝ち得るでしょう」と将軍に言った。

こうして、将軍は陣を「常山の蛇勢」の形に似せて布いた。将兵は奮い立って関の声をあげ、その声は天地にどよめいた。両陣営は正面から挑んで大いに戦った。

貞任ら遂に戦い破れて逃げた。官軍は勝ち戦に勢いを得て、逃げる賊兵を追跡した。賊兵の多くは磐井川まで逃げたが谷に落ちたり、深い淵にはまって溺れ死んでいった。暴虎馮河のように無謀にも立ち向かってきた賊兵は、官軍が襲い掛かって討った。

(23) 武則、敗兵を追撃し、将軍、傷病兵を見舞う

将軍は武則に「深夜、追う道が暗いといっても、賊軍の士気回復のいとまも与えず、必ず追い攻めたてよ。今晚一晩、賊兵に一息つかせると明日にはきっと勢いを盛り返さだろう」と告げて言った。武則は精鋭を率いて闇夜に敗兵を探索して追撃した。

将軍は陣営に引き返して将兵に酒食を与えてねぎらったり、鎧や武器を整えさせたりした。将軍自ら陣中を見回って深手浅手を負った者に手当をし、兵士たちは感動した。

かくして武則は策略をめぐらして、兵士五十人を選びすぐって西山から貞任の陣中に忍び込ませ、突如、営舎に火をかけさせた。その燃え上がった火炎をみて、官軍は関の声をあげて攻撃した。貞任らは不意を突かれて陣中は混乱した。驚き慌てて、自ら同志打ちして死傷者が夥しく出た。

(24) 六日(康平五年九月六日)、衣川の関攻撃

将軍は高梨の宿に着き、その日のうちに衣川の関を攻撃しようとした。

この衣川の関は、もとより道幅狭く陰しく、峠山や函谷関の強固さにも勝る要害の地である。一人の兵が峻嶮を占めて防ぐならば、万人の兵でも攻め入ることができない。

まして樹木を切り倒して沢を塞ぎ崖を切り崩して路を埋めている。また長雨の晴れる間もなく流れは水嵩を増し溢れている。しかしながら三人の押領司がこの関を攻めた。

兵士らは一斉に衣川を超えて渡った。そして藤原業近の柵に忍び寄って、突如火をかけて焼いた。貞任らは業近の柵が焼け落ちるのを見て、ひどく驚いて逃げ去った。遂に関を防げず、転進して鳥海の柵を保全しようとした。

※業近というのは通称大藤内で、宗任の腹心

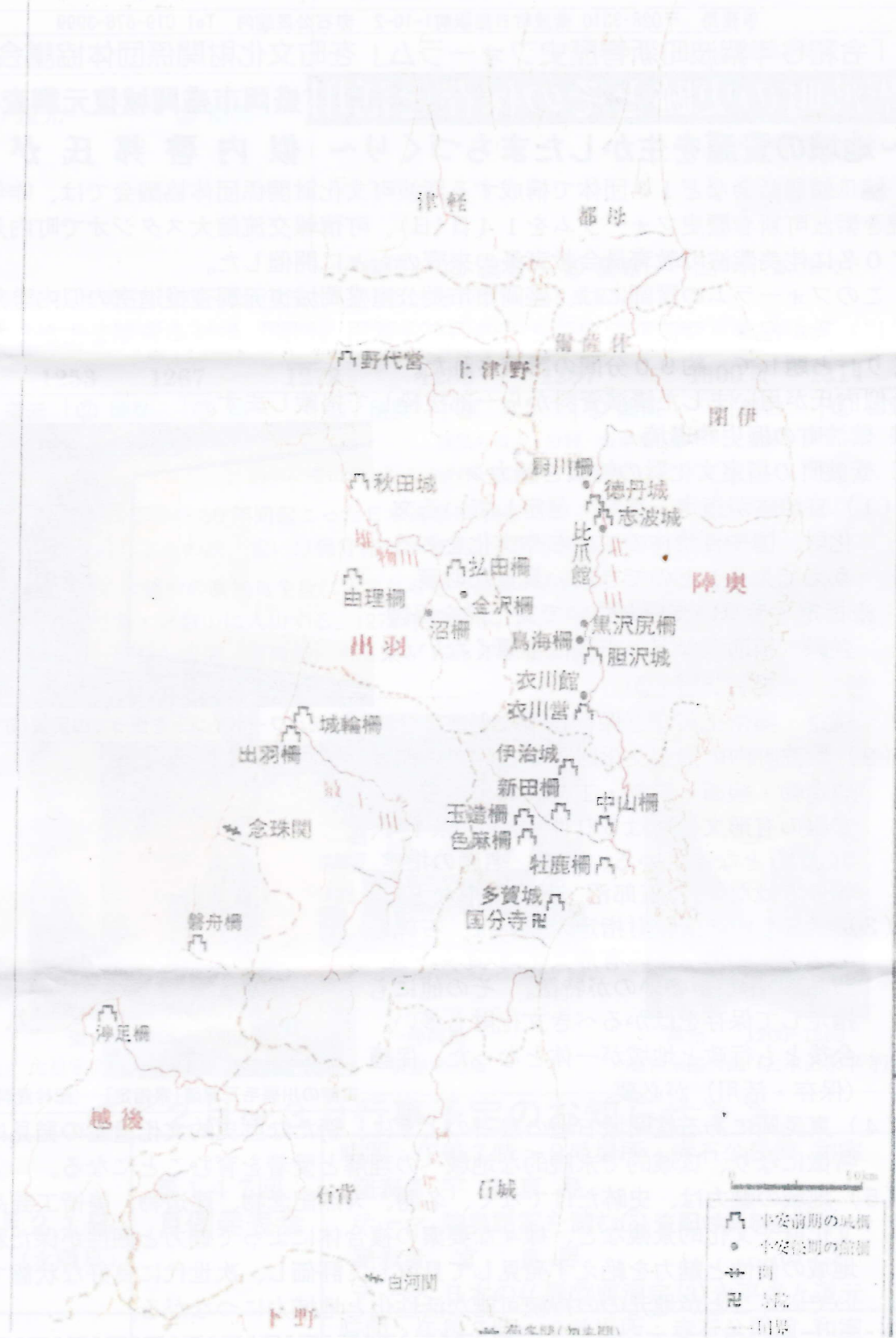
(25) 捕虜から賊軍の死者を聞き出す

同月七日に、衣川の関を破り胆沢郡白鳥村に着いた。大麻生野及び瀬原の二柵を攻め落とし、賊兵一人を生け捕った。その兵が申し述べた。「たびたびの合戦で、我が軍の頭領で討たれた者は十数人である。言うところでは、散位平孝忠、金師道、安倍時任、安倍貞行、金依方らである。いずれも貞任、宗任の一族であって、剛勇で身の軽い精鋭であった」と。

※大麻生野=胆沢郡前沢町(現奥州市)白山麻生と前沢町(同)大字稻置内館の二説ある。

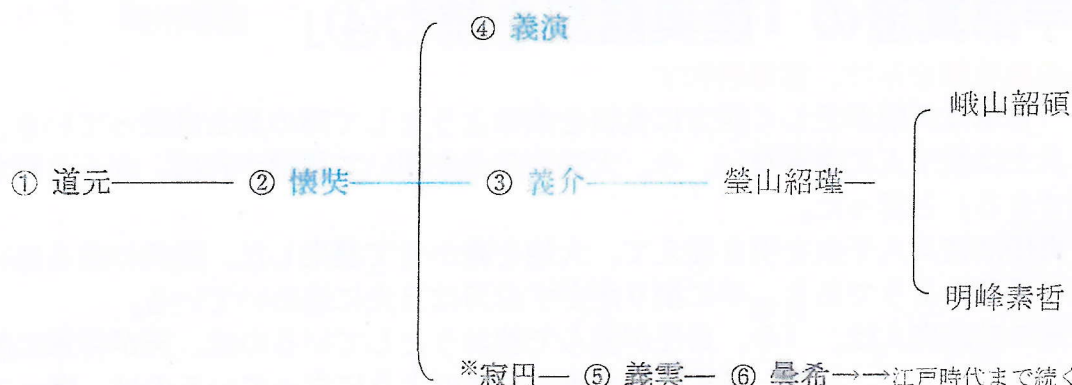
※瀬原=比定地は明確でなく、前沢町(現奥州市)大字白鳥、西磐井郡平泉町字瀬川、水沢市(現奥州市)水沢瀬台野、胆沢郡衣川村(同)大字下衣川の四説ある。

奥州略図



日本書典文学全集「奥州略図」

宮良男の「日本の仏教②曹洞宗(2)永平寺と道元 曹洞宗(永平寺)の流れ



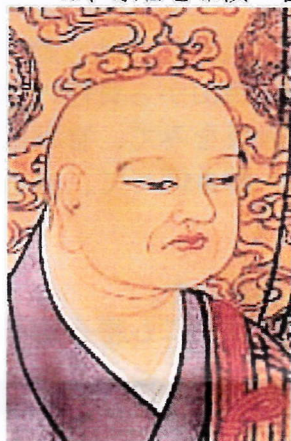
※ 寂円：智深寂円(1207~1299)道元と宋で一緒に如浄の弟子となり来日する。

1261年宝慶寺を建立する。聖胎長養(銀碗峰石上)「永平寺奥の院」「曹洞宗第二道場」

1253	1267	1272	1280	1287	1300頃	1314
① 道元	② 懷奘	③ 義介	②' 懷奘	③' 義介	④ 義演	⑤ 義雲
温厚・篤実で融和	達磨宗から		懷奘の遺志・分裂	波多野氏の信頼?疲弊	永平寺中興	
		瑩山が永平寺で修行→1283		1293→再度永平寺へ		

三代相論：1267年から50年間起こった日本達磨宗(興聖寺から)と曹洞系(道元の直弟子)との内部対立との説、或いは保守派對民衆強化を図る改革派とも言われる。

瑩山紹瑾：1264年越前の豪族瓜生氏に生まれ8歳で義介の元沙弥、13歳で懷奘の元得度その後諸国行脚・比叡山に入山する。1272年永平寺、1313年永光寺、1321年総持寺で正法を広め、宗旨を布演「曹洞宗」を名乗り1325年示寂する。祖母明智は道元の初弟子。



瑩山 1264~1325
太祖常済大師(大本山総持寺)



一佛兩祖
釈迦牟尼仏



道元 1200~1253
高祖承陽大師(大本山永平寺)

《《2月~3月行事予定のお知らせ》》

2月21日 (水曜日)	第147回 月例発表会	時間：午後7時~9時 場所：赤石公民館 和室 発表者 宇部真澄 テーマ 陸奥話記を読む⑤ ※配付資料を持参 発表者 宮良男 テーマ 日本の仏教②曹洞宗(3)永平寺と道元
3月20日 (水曜日)	第148回 月例発表会	時間：午後7時~9時 場所：赤石公民館 和室 発表者 宇部真澄 テーマ 陸奥話記を読む⑥ 発表者 宮良男 テーマ 日本の仏教④曹洞宗(4)永平寺と道元